



南嶺子

三

415
77
3



察之シテ滋味シテ加減シテ此一味トモ痛ム者ハありとて其ノ苦ク茶ヲ疾ヲ除ク一ト加ス。
 古人ノ加減スル者ハ多ク合シて味ノ位ヲをシり。只其ノ味ハよくシて味ヲ考ヘ。
 ちり々ニ庸醫ノのハたテり。良茶ハ口ヲ苦クしテ古語ハあれバ人常ハ飲食ヲ。
 小耳ハたれテり。幸いハあリあり。此種ハ梅ノたれテり。一とハ縣ノよリ多ク取ル。
 いハ後ノ良茶ヲたれテ人ハよくシてハ害ヲあり。一とハいハつテハハ近キ年ハ。
 のハあリのハれ。病家ハてハ其ノ味ノ位ヲをシり。一とハいハつテハハ近キ年ハ。
 而シテ後ノよリそのノ味ノ位ヲをシり。一とハいハつテハハ近キ年ハ。
 肉ノのハ味ノ位ヲをシり。一とハいハつテハハ近キ年ハ。
 腹ノのハ味ノ位ヲをシり。一とハいハつテハハ近キ年ハ。
 一トハハ近キ年ハ。
 史記ハ秦始皇本紀ニ。秦ハ水ノ徳ヲ。

以王ノ方ハ六ノのハ數ヲとシり。一とハいハつテハハ近キ年ハ。
 以テよクとシり。一とハいハつテハハ近キ年ハ。
 懐ノ小ノとシり。一とハいハつテハハ近キ年ハ。
 とシり。一とハいハつテハハ近キ年ハ。

臣

○或ハ醫者ハ博ク學シてハ才ハ小シくハ方術ハ亦ハ精クなり。一とハいハつテハハ近キ年ハ。
 ねノのハ風ノ説ヲもシてハねノねノ業ハ決シてハ貪ムくハなリ。一トハハ近キ年ハ。
 仲景ハ丹溪ハ肺肝ヲ入シてハ良方ヲ持シてハ運氣ヲ考ヘてハ者ハ驅レ小ノ時ヲ失ス。
 然レもハ他ノ合ハ八ノ解ヲ教ヘるハよくシてハ。一トハハ近キ年ハ。
 功ヲあり。一とハいハつテハハ近キ年ハ。

師子舞。師子擊獸出於西南夷。天竺師子等國。綴毛爲之。各
高丈餘。人居其中。像其倏仰。馴狎之容。二人持繩。秉拂爲習
弄之狀。三獅子各放其方。色百四十人。歌太平樂舞。以足持繩者。
服節作。寔審象。樂書の意と按じらふ。獅子と王化の及ぶ
き。後遠き國小あり。のりた。その獸まで。漢さあつて。五方志
くちろろろろ。舞て舞うらとつら。抑りて。人の中より。て。
さるく。小をといふ。太平系の體とらる。の義なり。即師子舞の
園との。人。是とつら。あり。樂書と古今經史。小見く。す。舞の
を。と。わ。我。蠶の樂。教樂俗伎。までの。口。を。い。る。や。ん。を。た。今。あ。天
日本。み。行。く。兩の樂。と。一。も。と。う。い。る。る。や。別。は。傳。國。舞。と。い。ふ。を。

五四

韎鞞舞と流氷舞の。ら。小。乃。ん。た。舞。の。と。い。り。陳。氏。の。樂。書。同。禮。書
學。若。見。ん。を。あ。ぶ。く。く。の。書。を。り。
○或諸侯。予。小。同。あ。ふ。と。け。き。嫡。男。少。子。を。繼。り。た。ら。ぬ。せ。う。の。よ
と。ま。け。に。一。番。息。子。か。か。り。げ。か。い。ぬ。と。い。な。り。何。れ。一。男。を。才。子
ふ。と。い。ふ。や。その。に。あ。り。や。と。予。區。入。ふ。あ。り。が。た。れ。の。を。我。を。て。を
い。は。す。て。は。二。男。あ。り。は。他。の。家。と。繼。り。も。は。出。の。もの。か。ら。い。て。才。子。を。得。ぬ
小。中。ま。た。い。ぬ。め。は。は。り。ぬ。り。は。二。男。ひ。下。と。よ。く。い。ひ。た。ん。と。す。ゆ。ん
也。宗。預。も。と。れ。り。た。り。ぬ。り。あ。ふ。族。よ。す。也。何。と。言。て。も。い。が。替。お。遠。か。き
は。身。ゆ。他。の。家。を。つ。く。ら。あ。ふ。及。び。く。や。と。り。又。或。諸。侯。の。同。あ。ふ。積。善
の。ゆ。ゆ。い。餘。慶。あり。積。惡。の。ゆ。ゆ。い。餘。殃。あり。と。い。た。大。惡。を。遠。の。人。の

南齊書 卷三十一

子孫の榮るあり。忠孝後徳の人の商のまねたり。あり。おれを
たの古籍を其の列字をいふ所の附。平信盛より似あふ大おとかが。信盛を入。信盛は其の信の
平信盛より似あふ大おとかが。信盛は其の信の
信武略より似あふ大おとかが。信盛は其の信の
信一正成母似あふ大おとかが。信盛は其の信の
古徳の徳教をいふ。信盛は其の信の
天子の御外神とあふれ。所の公や殿上人請司信府の事なり。榮
る信盛は其の信の信盛は其の信の
と思へり。信盛は其の信の信盛は其の信の
こと盡して信盛は其の信の信盛は其の信の

信河めく自害し。信河は其の信の信河は其の信の
信河は其の信の信河は其の信の
信河は其の信の信河は其の信の
信河は其の信の信河は其の信の

四

○正成信川の寺院にて自害の時。楊七郎が生るるの死をうけ。教を
さむる。信河は其の信の信河は其の信の
信河は其の信の信河は其の信の
信河は其の信の信河は其の信の

四

○信陽家の説小。去月後。信陽は其の信の信陽は其の信の
信陽は其の信の信陽は其の信の
信陽は其の信の信陽は其の信の
信陽は其の信の信陽は其の信の

諺准據無定加以或國獨置女祝亦主其祭若大臣宣旨自今以後
祿宜祝並置社者以女爲祿宜下畧也此を今より市々女祝あり
て祿宜の餘風也

○今より革を御としていたむ。むしと朝官の人も表とさうして
り。三代實錄卷第十七仁和元年正月十七日文曰天皇御建禮門觀
射禮是日始禁着用貂裘但冬儀已上非制限古今の吳々々を
看つてし。

○鳥居のヨリ異は多く列仙傳のヨリ華表のありきと云ひ
と小字標華表の字を有る人あり。爾雅第四釋宮篇曰雞
棲於七爲標鑿垣而棲爲甍疏曰七槩也詩經小雞棲于桀

と云即是此の字彙み極其月切門中槩爲關又木段即也
と註より雞棲の号因て来る事尚一吾大日本古来より上
長押と其上よりふ小柱ありて是を鴨居と云ふ即雞棲于桀
の處めて水宮の名を以て火と云ふの記を記表雜用を
ぬ母屋痕の形圖とのやうなるものあり。舟の号あり。舟は
門是より社地と云ふ限をさるるゆゑは金本と云ふの字を鷄
棲といふ俗めなり。やまきよめ。舟もさる。金神の名あり。あ
らび伊勢諸尊伊弉冉尊二柱のありき。て鷄栖を根の
爲と云ふなり。

○日本書紀の安閑天皇と結體天皇の長子との也。欽明天皇

八尾天皇の嫡子とあり。安閑帝と元妃月子媛とて尾張連草香の女のうらり帯有り。たよおのけれぬた。嫡子とあり。皇極天皇とて。正后手白香皇后のうほせあり。此弟をうら。嫡子とて。嫡妻とて。嫡母の嫡なり。國史に。妻服の庶子ハ。虎見養妹あり。あり。夜の義あり。嫡子。長子。太郎。小太郎の義も。是の同じ。○京。天原の女の。とて。め。三。とて。を。助。とて。京の八。うら。と。三。切。な。な。日。と。二。合。と。て。を。并。と。十。と。六。と。ケ。ハ。と。よ。ひ。例。之。の。二。字。を。請。の。字。一。而。己。の。二。字。と。耳。の。一。字。と。は。是。二。合。と。は。る。る。轉。録。め。も。く。筆。談。も。二。合。と。は。加。字。

五五

の原とあり。○猿樂の舞曲。小袖をひき。或を衣とひき。て。之。は。五。原。と。日本書紀を考れば。天武天皇禮ありて。樂をうたひんそ。お。わ。も。お。も。さ。ひ。し。も。から。な。を。火。の。も。と。ふ。は。ま。て。は。も。さ。ひ。し。も。と。い。ふ。方。を。製。の。よ。び。ぶ。ぶ。と。い。舞。時。五。の。袖。と。結。は。五。原。の。舞。と。号。は。五。原。愛。神。と。春。秋。左。氏。傳。ふ。ん。と。字。形。り。本。の。文。粹。中。々。天。女。天。り。て。け。な。と。は。舞。と。あ。れ。る。國。史。を。以。正。と。は。續。日本。紀。寶。龜。二。年。辛。卯。の。文。曰。葛。井。船。津。文。武。生。藏。去。氏。男。女。二。百。二。十。人。供。奉。歌。垣。其。服。並。著。青。摺。細。布。衣。密。紅。長。級。男。女。相。並。分。行。徐。進。歌。曰。わ。ら。ら。ぬ。お。も。さ。ひ。し。も。の。た。よ。お。の。ま。其。の。歌。曰。

六五

の原とあり。○猿樂の舞曲。小袖をひき。或を衣とひき。て。之。は。五。原。と。日本書紀を考れば。天武天皇禮ありて。樂をうたひんそ。お。わ。も。お。も。さ。ひ。し。も。から。な。を。火。の。も。と。ふ。は。ま。て。は。も。さ。ひ。し。も。と。い。ふ。方。を。製。の。よ。び。ぶ。ぶ。と。い。舞。時。五。の。袖。と。結。は。五。原。の。舞。と。号。は。五。原。愛。神。と。春。秋。左。氏。傳。ふ。ん。と。字。形。り。本。の。文。粹。中。々。天。女。天。り。て。け。な。と。は。舞。と。あ。れ。る。國。史。を。以。正。と。は。續。日本。紀。寶。龜。二。年。辛。卯。の。文。曰。葛。井。船。津。文。武。生。藏。去。氏。男。女。二。百。二。十。人。供。奉。歌。垣。其。服。並。著。青。摺。細。布。衣。密。紅。長。級。男。女。相。並。分。行。徐。進。歌。曰。わ。ら。ら。ぬ。お。も。さ。ひ。し。も。の。た。よ。お。の。ま。其。の。歌。曰。

少の遊もきあぐさや者一そくがらとせとまらてはあつても毎歌
 曲折舉袂為節其餘四首並是古詩不復煩載多とゆふあ方よ
 甲田方女もてをとあげて舞その袂をたのむを好とてたあふま
 是しひい室の同青地をゆると歌恒と号以釋日本紀十五卷小楠
 節舞とを註して手以指為節度故俗とあるも然り節は只
 と今の俗候とともらふは同一。

○尾張國名護屋は四五年遊びて去學と武門の志を教門
 人の誓言約ふおのふおのそ二百人ふりたり。去學と馬場氏ふとゆり。
 故実と五味氏ふのりて節も其大極をゆるとあはた二氏の志
 と揚やちや加は或時津島ゆきて。神皇正統記は遠近一國史

たりと海もあふ。真野時綱の撰書百有餘巻と著は持光強
 記誠ふ一方の本家といふ。真野氏とて京師ふあり。松府の
 舊又ふかれを其功も亦大なりきふ。記録は疎りて遺恨ある
 べし其言身宇於文兵助とふ彼書を守りて師とておとす。つら
 大勢のちの近事み成く人のあつたをわし。あふまらてその功
 を著さんといふ。

○伊勢ゆ遊ひらるは豊受皇大神宮の大宮の文庫少て職原
 教と海トる。文庫の書籍を尋見しらる。あつたの書。あは
 の舊記多くあつたり。今の長官そのはち。二体とてあつた
 もとい遠近一國史。録録たといふはあはた。あはたは河

と号して大川より来るてハ出さる海へ。うららのこもあかしく
勢ひは非宮中かくのどく書編も多きふ。肉文もやまのり
とを。近佳林との功といふなり。

九五

○詩經ふ梅を賞するのこめく梅を愛して詩を。梅をちへる
もの梅ありかどてをを賞する。實をの賞する。おれを漢が梅を
賞するや。後とるふ。大日本上古より梅を愛するを。仁徳
の帝み寶祚をよめり。難波津の源あり。萬葉集ふ花と
こころる。梅をり。古今集より梅と西をふり。土境近
古の如く。りめく。のどく。知らふ。おれを。外域の風を。めんと
を。悉く。後ふ。びけ。を。学者。せんや。いん。

十六

○中葉氏の老人の病。中葉氏を。食んを。客を。け。既ふ。著
糸の如く。是を。大葉。ふ。や。ゆ。で。よ。よ。よ。一。と。め。の。び。め。ら。湯。
とけて。形。あ。い。め。く。た。ら。と。水。と。て。又。ゆ。で。よ。よ。よ。を。湯。
湯。ゆ。は。眼。あ。く。者。か。あ。く。ら。と。を。飯。と。出。し。變。り。う。わ。く。
む。ふ。其。の。荒。海。布。と。な。く。た。き。う。綿。と。なり。手。は。筋。を。耳。よ。ら。
その。ち。古。葉。の。人。を。て。う。を。を。う。と。食。して。脈。を。く。い。す。身。
醫。人。を。ひ。り。り。其。其。厚。ひ。て。る。ふ。お。び。の。荒。海。布。と。せん。こ。を。く。
月。ひ。り。後。痛。た。ら。ま。ら。ぬ。作。り。古。人。の。も。ど。り。て。葉。の。結。毒。と。なる。
もう。ら。の。う。ら。う。荒。海。布。と。を。消。の。は。と。痛。の。な。草。も。も。る。ん。
錢。を。葉。み。ゆ。ら。と。嚙。む。う。く。と。れ。及。物。と。う。き。び。の。ゆ。ら。と。

兼をわたりて切まきむらう極干も核もみ輪切ふなる類者工
 夫しと位知しつちやあつじ。其のよゝむるが核とをりつちあつじ。
 古人のそやし事し。後世のよの政事とするも亦よのやし。

一六

○刀劍の柄を合ひていふ字。核は書人あれ兼の字と刃
 下。近喜兵庫寮式小太刀と造子細との也分兼合兼といふは
 兼と字書小把也執也と注していふもをならすと略してねごととあ
 まりり。

三六

○禮記曲礼曰教不可長欲不可從志不可滿樂不可極とあるは佛家
 にも極樂を眼的として安養世界へつひ核をいふよ極を
 いふ。傍仏相容らうの我がくの。核をいふよまなむつと人ま

を核しつちつちあつ信者多く藥を以毒を毒とす毒と以毒
 を治するとの教の別人もと案せよ

四六

○足輕といふ名月兵子母輕足とある即足ぬり諸注も核を
 者しつち。物をも異邦の輕足といふと。一核ある職ゆく。日本の
 足輕といふよりいふき

四六

○或は石の修りれりつち。柿本人麿と石見の人といふり。核よのお
 ことしと修り。お分よとあつち石とほ後世までけけの神まうとあ
 とひんれを田舎人の者とも。そのをむちゆつちゆつち。ゆつち
 ふかあつち。何と地下の者として悔らんや。今とつち。ゆつち。ゆつち。ゆつち
 らりり

五

○猿樂の伎目も。つづる百四十年のころふかたなるゆき多し。大蔵
 記十四文祿二年卯月九日。流紫名獲屋めての結紐ふ。ふ歳振
 大蔵六。さんむとて。大蔵。能蔵。○もみ出。大蔵。平。ふ。さ。ふ。幸。ふ。水。新
 とありて。ふい今。ふ所。ふ。ふ。ふ。て。謡曲の名。ふ。ふ。今。ふ。か。ふ。ま。ら
 ぬ多し。古名。と。雅。ふ。ふ。と。実。あり。萬。ふ。ふ。の。ふ。ま。ら

南嶺子卷之三

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

